

第5回

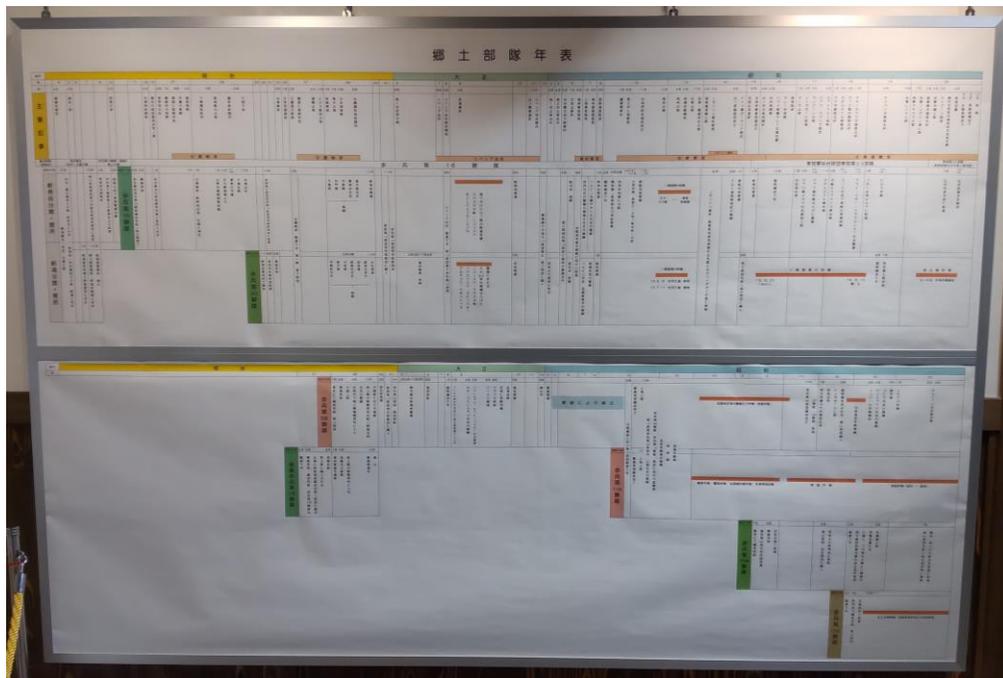
“郷土部隊”とは

皆様いかがお過ごしでしょうか？

前回・前々回ともに「銃」が題材であったため非常にマニアックな内容となりました。このことについて特に反省はしませんが、歩兵第十六聯隊を始めとする郷土部隊に最大の敬意を払い、適度に脱線しつつ、歴史の興味深い点を掘り下げていきます。（今回は脱線多めです）

さて、今回は史料館でよく見かけるワード「郷土部隊」についてお話したいと思います。右写真の年表は新発田兵営において編成された各聯隊の戦跡を記したのですが、タイトルに大きく「郷土部隊年表」とありますね。郷土とは「生まれ育った土地」、「故郷」という意味を持ちますが、郷土部隊という言葉の本来の意味を今回は掘り下げていきたいと思っています。

（なお、今回の記事は帝国陸軍をメインに書いています）



史料館2階の郷土部隊年表。各聯隊の発足から終戦までの流れが一目でわかります。

郷土部隊年表												
大正						昭和						
7	8	9	10	11	14	2	3	6	7	8	1月	
8月	9月	3月		10月		5月	4月	6月	7月	8月	1月	
シベリア	シベリア	尼港事件		日ソ軍事	シベリア	第1次山	第2次山	中村震太	万宝山	満州事変		

— そもそも帝国陸軍とは —

残念ながら今の学校では当時の陸軍がどんなものであったのかを教わることは殆どないと思います。筆者が中学生の時は授業中に映画『二百三高地』となぜか『対戦車兵器特集』を見せてくれた歴史の先生がいましたが、今はどうなんでしょうね？（素晴らしい先生でした）という訳で（？）、「陸軍とは」からざっくり始めたいと思います。

— 近代陸軍の成り立ち —

明治維新以降、諸外国から国を防衛するために近代的な軍隊を持つことが必要になりました。そこで、最初は陸軍強国であったフランス軍をお手本に軍隊を作りました。（幕末から既にフランス式練兵は取り入れられています）その時フランスから招いた軍事顧問の一人がマルクリー中佐で、白壁兵舎の建築様式にも関わる重要人物です。まさか150年近く後に鳥のゆるキャラ（マルトリー中佐）にされるとは夢にも思わなかったでしょう。



明治11年、明治天皇が巡幸された際に描かれた絵画（複製）。取り壊された新発田城址と白壁兵舎が描写されています。（絵の実物は宮内庁所蔵）



↑マルトリー中佐。陸軍は結局ドイツ式で編成されるのですが、それは禁句。

戊辰戦争等の内乱もありましたが、紆余曲折を経て明治4年に近代日本陸軍の基礎が確立されました。翌年には「徴兵令」が施行されます。

この「徴兵制度」も今回のキーワードになります。この制度は明治初頭から大東亜戦争の終戦まで幾度となく改正されており、非常にわかり難いので本記事では戦間期（第一次大戦後～第二次大戦前）の平時を例に挙げて進めたいと思います。理由は比較的平和で、制度的にも安定していた時期であるからです。

— 脱線① 徴兵制度について —

制度自体はご存知の通り、男子に兵役の義務を課したものです。よくよく調べてみると「国民皆兵」と言うほど全員が軍隊に入ったわけではなく、あくまで軍隊に入れるかどうかを調べる「徴兵検査」を受けることが全員（男子）の義務であったと言えます。

徴兵検査は毎年春頃に実施されており、20歳になる年に受検する義務がありました。



↑ 史料館の展示より。写真の人々がどんな人たちだったのか？そこを確かめたいと思います。

徴兵検査は毎年春頃に実施されており、小学校などが会場として使用されました。基本的に本籍地（≡出身地）で受験することが通例で、郷里を離れて働く人もそのために帰郷したそうです。検査では同級生が揃いますので、その夜は同窓会になることも風物詩であったとか。（調べていてなんとなく成人式っぽいと思いましたが、本当に「成人式は徴兵検査の名残」という説もあるとか・・・）

当時は徴兵検査を終えて晴れて一人前の大人として扱われる風潮だったようで、未成年は「検査前」と呼ばれ健康を保つよう言われていたようです。お酒やタバコはもちろん怒られます。（今と変わりませんね）

ちなみに徴兵検査の内容は身長体重等の身体測定の外に視力、聴力、持病の有無など・・・一般的な健康診断と同様です。不合格になる人は様々な理由がありますが、身長不足や体重不足（栄養失調）という人もよくいたようです。不合格になったからと言って特に罰則があるわけではありません。



↑徴兵検査の様子。（史料館所蔵「陸軍聯隊総覧」より抜粋）
ちなみに身長は152センチ以上が合格基準でした。明治の頃はこの身長で不合格になる人が多かったとか。

— 脱線② 陸軍を解説！ —

郷土部隊の解説をする上で、まず「陸軍とは何か」を知っていただいた方がより理解していただけたらと思います、簡単ながら陸軍の組織と、そこでの生活模様を簡単ながら添えたいと思います。

1 階級について

軍人は階級で区別されています。階級が高いほど偉い（直球）です。色々な階級がありますが、大別すると3つに分けることができます。（階級も時期によって細かく異なりますが、ここでは昭和初期の一般的なものを用いて説明します）

(1) 士官（将校）

階級で言うと准尉以上の軍人です。各種部隊の指揮官となる階級で、下は小隊長から上は軍司令官まで様々です。尉官（准尉～大尉）、佐官（少佐～大佐）、将官（少将～大将）と上がります。

この階級の人々の特筆すべき点は支給品という概念がなく、軍服から武器から身の回りのものは自分で調達（購入）していたことです。さぞお金がかかって大変だったのではないかと思います。



(2) 下士官 (かしかん)

士官より下で兵卒より上・・・**中間管理職**です(違う)。伍長、軍曹、曹長、特務曹長(後に准尉で士官扱いに)などの階級がこれにあたり、中隊本部の運営や小部隊(分隊等)の指揮官となって兵卒を直接指導する役割です。士官からすれば自分の命令を具現化するために必要不可欠な存在ですが、兵卒からすれば**経験豊富な下士官は誤魔化しが効かない怖い存在**だったでしょう(“**鬼軍曹**”なんて言葉もあります)。平時の下士官は主に入営後志願して軍隊に残った兵卒上がりの人たちです。

(3) 兵卒 (へいそつ)

物事は万事上があれば下もありますので、兵卒がそれ(下)に当たります。徴兵により入営した人が就く階級がこれで、二等兵、一等兵、上等兵があります。(時代によって伍長勤務上等兵や兵長などもありますが、**ややこしいので省略**します)入営後まず二等兵となり、2年目には一等兵(選抜された者は順次上等兵)になります。当時は上等兵で満期除隊して帰ると**村長等が祝宴を設けてくれる**くらい褒められたそうです。



↑兵長は日支事変以降に増えた階級。准尉は特務曹長が置き替えられたもので、下士官であったのが将校扱いになりました。

2 部隊編成について

陸軍には歩兵、砲兵、騎兵など様々な種類の部隊があり、それぞれ異なった人数で構成されていました。今回は最も一般的な歩兵連隊を基準に説明したいと思います。

連隊は大隊以下の集合体として編成されています。小さい単位から見ていくとわかり易いです。

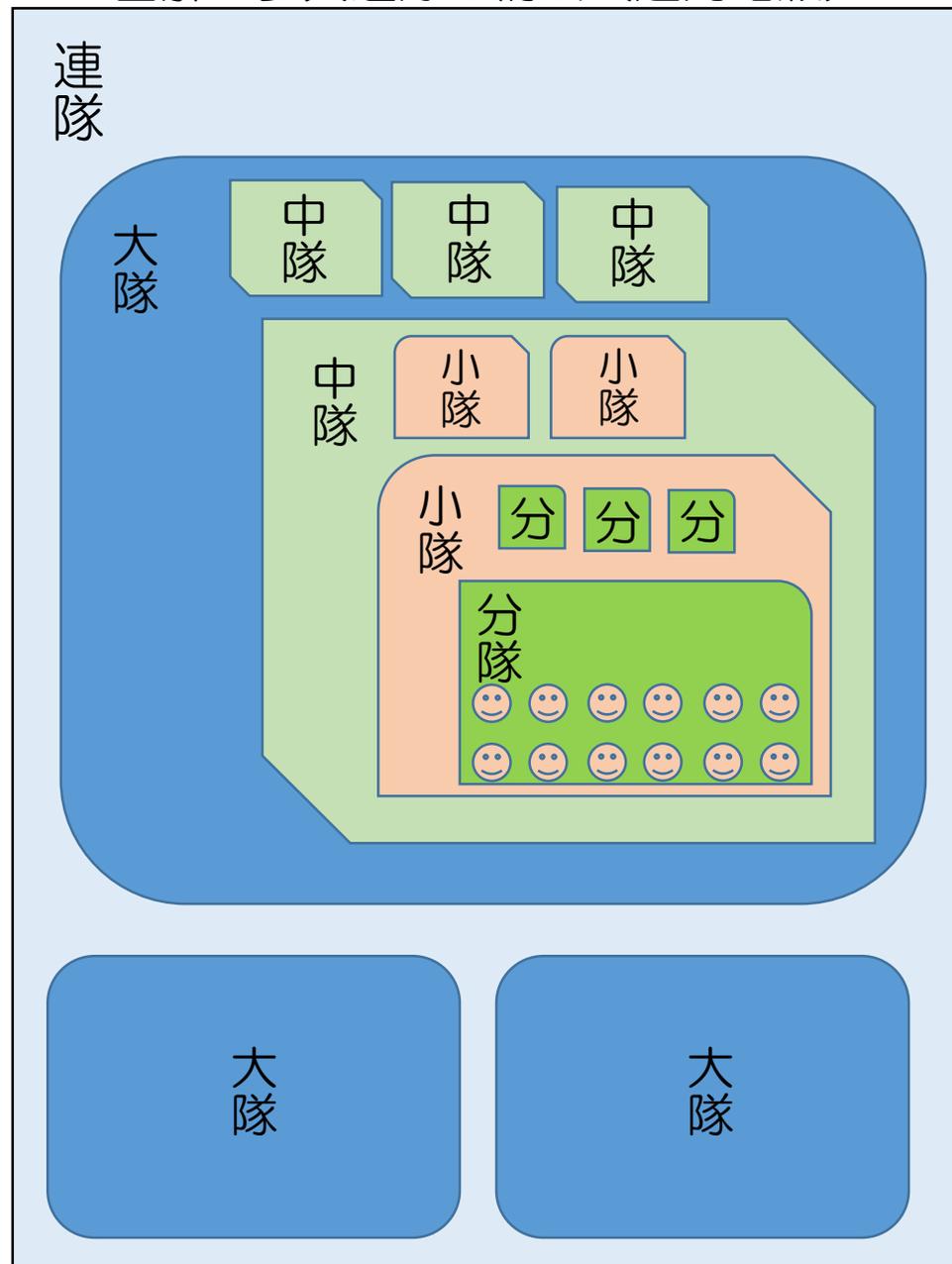
部隊の最小単位は「分隊」です。基本的に12名程度で構成されます。

この分隊を基準に考えると、4個分隊で1個小隊、3個小隊で1個中隊、4個中隊で1個大隊、3個大隊で1個連隊・・・という感じですね！（右図参照）

（※分隊・小隊は戦時のみ編成されるもので、平時は中隊が最小単位になり、中隊内の内務班というグループ単位（10名程度）で訓練・生活することになります。）

歩兵連隊は基本的に銃中隊（小銃で戦う歩兵の部隊）と機関銃中隊、歩兵砲（歩兵が扱った小型の直射砲）隊及び連隊本部で構成されていました。

図解・歩兵連隊の構成（超簡略版）



－ 脱線③ 兵營の生活 －

では、当時の兵隊さんが実際どの様な生活を送っていたかですが、2年間の兵役生活は初年度と2年度で大きく異なります。入営当初は二等兵として始まり、入営1年目の兵隊を「初年兵」2年目を「二年兵」と呼ぶことが一般的でした（上等兵は除く）。兵舎内ではこの初年兵と二年兵の寝台（ベッド）が交互に並ぶようになっており、寝台が隣同士の者を「戦友」と呼びマンツーマンで指導していたのです。入営は1月10日で、12月が除隊時期（除隊日は不定）でした。二年兵が満期除隊すると、今度が自分が二年兵となり、新たにやってくる初年兵を指導する。そんな感じの連鎖だったわけですね。

さて、前置きが終わらないので少し巻いていきます。



↑内務班の様子。初年兵にとっては両隣が先輩なので気を遣ったと思われます。

←史料館の復元コーナー。兵舎の一部が再現されています。装備品類は全て実物が置かれています。

— そして本題へ —

記事のメインテーマを忘れそうになりましたが、そろそろ本題に移りたいと思います。

徴兵検査に合格した方の入営先は基本的にその地区の聯隊、つまり出身地にある部隊です。よって、陸軍部隊はそれぞれの地元の人で編成されていることになります（将校は除く）。新発田兵営にて編成された聯隊はほとんどが新潟県出身者で構成されており、これこそが郷土部隊と言われる所以です。「その土地にあった部隊」という意味だけではなく、その土地の人々による部隊だったわけですね！

帝国陸軍の部隊は以上の理由で同郷の人が多数を占めることになるので、団結力があり、その地域性もよく表れていました。

では、新発田兵営の聯隊はどのような部隊だったのでしょうか。



↑新発田兵営の酒保（しゅほ）の写真。外に設置された席で飲食する人々です。当時の人々の表情もよくわかる、個人的に好きな一枚です。ちなみに酒保とは売店のことで、中で暮らす兵隊向けに飲食物や嗜好品、日用品などを販売していました。代表的なメニューはうどん、アンパン、冷やしラムネ（夏）、おでん（冬）など。演習日の夜はビールやお酒も販売していました。

— 越佐（えっさ）部隊の特徴 —

新潟の部隊は別名越佐部隊とも呼ばれます。越後、佐渡の出身者からなる部隊だからですね。現在でも米どころで有名な新潟県は農村出身者が多く、足腰の強い人が多かったようで、部隊としても健脚で知られたそうです。

（日清戦争において新発田から最寄り駅のある郡山（福島県）まで140km余りを歩いて移動したエピソードは有名です）

また、新潟県民は温和人が多く、部隊内も和気に溢れ喧嘩や私的制裁（暴力）は皆無であったと言われています。

そしていざ戦いにおいてはとにかく粘り強く、日清・日露戦役からシベリア出兵、満州事変、日支事変、ノモンハン事件から大東亜戦争まで常に前線で戦い抜きました。史料館の数々の展示を見ると、十六聯隊の功績の大きさとともに、今の日本がどれほどの困難、激闘の上に成り立っているかを知ることができます。「温故知新」という言葉もありますように、過去にどのような人々が生きて、どのようなことがあったのかを知り、その上で未来を考えることが大切です。若い世代の方々にも是非、機会あれば史料館を見学していただきたいと思います。（了）



広漠たるノモンハンの平野を行軍する部隊

↑ノモンハン事件当時の十六聯隊の写真。史料館を見渡すと歴史的な戦いの全てに十六聯隊が参加していることがわかります。



↑【おまけ】勤務員時代、特別展示用に制作した十六聯隊の南方の戦いを模したジオラマ。今も縮小版が展示されていますので探してみてください。